



## episode 35 自己肯定感を高めてくれた三番目のこぶた

投稿者 森 悩 さま(千葉県)

私には、年の離れた兄が二人いる。長男はスポーツができ、次男は勉強ができた。

末っ子の私は、どれも兄に勝てるものがなかった。

今、考えれば、兄は同じ年齢ではないので、比較する対象ではない。

だが私は、そんなできる兄と自分を無意識に比較して、ずっと自信が持てなかった。

幼心に、「自分には何もない」と思っている筋があった。

そんな私に、光明をもたらしてくれた絵本があった。それが『三びきのこぶた』だ。

有名な昔話をちゃんと読んだ時に、私は考え方を変えるきっかけを得ることができた。

私は三番目の息子だったため、絵本に登場する三番目のこぶたに自分を投影して読んだ。

恐ろしいオオカミが、何とかレンガの家から三番目のこぶたを出そうとしてカブ畑に誘うシーンでは、私は「行ったら危ない！」と夢中になってこぶたを止めた。だが、こぶたは知恵を使ってオオカミを出し抜く。それでも諦めないオオカミは、次にりんごの木に誘う。

こぶたが手間取ってオオカミと鉢合わせするシーンでは、ドキドキ・ハラハラと心臓が止まりそうになった。

しかし、こぶたは冷静に、また知恵を使ってオオカミをかわしてゆく…。

私はどんどん絵本の虜となって、読み進めていった。

絵本を読み終わった頃には、私は自信がついたような気がした。

三番目でも、兄たちをよく見て勉強すれば、同じ失敗をしなくて済む。

私も「知恵を使って三番目のこぶたのようになりたい」、そう思っている自分がいた。

それからというもの、三番目のこぶたは、私の理想像となった。

思い返せば、あの絵本のおかげで私は自己肯定感が高まったと思う。

下の子どもは、常に上の子どもと自分を無意識に比較してしまっている。

そして、親の知らないところで勝手に劣等感を抱いていることがよくある。

そんな自信の無かった私に、知恵を使って活躍した三番目のこぶたは、新たな道を示してくれた。

兄と比べず、自分の行くべき道を教えてもらった『三びきのこぶた』には、今も感謝しかない。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2020」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300~450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまつたエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



『三びきのこぶた』  
イギリス昔話  
瀬田貞二 訳 山田三郎 画  
福音館書店 1967年





## イギリスの伝承童話が有名になったお話

民間口承童話『3びきのこぶた』を文字に起こしてまとめたのは、イギリスの童唄・昔話収集家であるジェイムズ・オーチャード・ハリウェルです。「3びきのこぶたの話」を収録した『イングランドの伝承童話』を1842年に出版しました。『3びきのこぶた』のお話が紙媒体となって出版されたのは19世紀ですが、おとぎ話そのものはもっと古くから存在していました。

しかし、この昔話が社会的に有名になったのは、ウォルト・ディズニーが1933年に発表したアニメーション映画でした。原作のおとぎ話から大きく異なる『三匹の子ぶた』が普及するのです。

## 1890年代ふたつの「三びきのこぶた」

ハリウェルが活字にした「三びきのこぶた」を次に再話したのは、ジョセフ・ジェイコブズです。ストーリーをほぼそのまま引き継いで、1890年刊行の『イギリス昔話集』に収載したのです。

ジェイコブズと同時期には、アンドリュー・ラングも再話を手がけ、『緑色の物語集』に収録して1892年に発表しました。その物語は、教訓的な意図にあふれていて、三匹の子ぶたの性格を、母親の視点を交えて語り、なお残酷さを避けて、幼年の読者への配慮がみられるものでした。このラング版について藤本朝巳は、「文学的のみれば、とてもおもしろいし楽しいのですが、書き手の思いが入り、昔話としては不自然」と指摘しています。

対してジェイコブズは、物語世界が虚構のフィクションであることを先に宣告しています。文章は端的に出来事の推移だけを伝えるきわめて動的であり、静止的な描写を伴うことがありません。また、表立った教訓がないのも特徴です。本来の口承文芸である昔話の語法と精神をできるだけ引き継ごうとしたのです。

先人が編み出した“語り”は娯楽として、はたまた生きる知恵として形作られ、世紀を越えて語り継がれてきました。この伝承文芸を絵本化することの核が

ジェイコブズ再話にあるのです。

## 落ち着いた色調とあふれるような語りかけ

日本ではじめてとなる絵本評論集を執筆した瀬田貞二氏は、「昔話はひとつ真剣な冒險であり、いのちがけの知恵比べであるはずの深い意義があって、ストーリーの連続を断ち切った、のんきな子どもだましの笑い話のようなものが乱暴に話されるのでは、小さな頭でどう理解し、どう感じていけるでしょう」と述べています。

つまり、家族が離れ離れになってでも、みなが生き延びていくために独り立ちを余儀なくされた三匹の子ぶたが、食うか食われるかの自然界に身を投じるという「昔話」をメルヘンに差し替える理由が見当たらないのです。それが、創作やパロディと明確に区分されるだけで良いのです。

瀬田氏はさらに、むかしアカ本とよばれた最も通俗的な『三びきのこぶた』について、「着色菓子のようなもの、けばけばしいもの、おどかすだけのもの、支離滅裂なもの、だらしのないものを、本とよぶことをやめましょう」と言及しています。

対比して称賛したのは、20世紀初頭に登場したレズリー・ブルック版です。『金のガチョウの本』に収録されている「三びきのこぶた」は、あくまでも豚として特徴的に、ごく薄い淡紅色で描かれ、風景と草花の色味がアクセントとなって落ち着いた色調と、躍動的な描線でごく控えめに、それでいてあふれるように語りかけると言います。

日本では、瀬田氏がジェイコブズの再話をほぼそのまま訳した『三びきのこぶた』を、福音館書店の月刊絵本「こどものとも」1960年5月号で発表しました。それが左頁の表紙画本で、ブルックの作品を彷彿とさせる昔話絵本です。

### 文献

- 1) 瀬田貞二：絵本論－瀬田貞二 子どもの本評論集、東京、福音館書店、pp.38-43, 1985.
- 2) 藤本朝巳：昔話と昔話絵本の世界、東京、日本エディタースクール出版部、pp.229-260, 2000.